訓練キャンプの集団力学的研究(Ⅱ)

山口　真人
佐々木　薫

問　題

いわゆる「課題志向的」集団が活動を持続するのに必要な集団機能として，集団の目標あるいは集団の課題の達成を直接的に促進する目標達成機能（または課題遂行機能）と，集団の維持強化あるいは成員の社会情緒的結合を直接的に促進する集団維持機能（過程維持機能）との2つの主要な機能の存在を想定することの妥当性は，これまで多くの研究によって支持されてきた（Halpin & Winer, 1952; Fleishman, Harris & Burtt, 1955; Bales, & Slater, 1955; 永田，1965a，1965b; 三隅，1966など）。特に三隅を中心とした研究グループはこの2つの集団機能をリーダーシップ機能に当てはめてPM式リーダーシップ論を展開し，多くの実験ならびに現場研究によって，課題志向的集団におけるPM型リーダーシップ（目標達成機能＝P機能と集団維持機能＝M機能のいずれをも多く果すリーダーシップ）の優位性をくり返し検証してきた。

しかしながら，現存する諸集団の中には，いわゆる課題志向集団と呼ぶにふさわしくないような種類の集団も存在する。例えばグループ・ワークの対象となるような集団やグループ・カウンセリングの対象となるような集団などである。Murphy（1955）はグループ・ワークの目的のうち広く認められているものとして，個人の可能性に向けての発達，人間関係と社会的に機能する能力の改善，ソーシャル・アクションなどをあげており，またOhlsen（1970）はグループ・カウンセリングの目的として，かなり健全な人びとがその問題をはっきり認識し，それを解決し，その学習を日常生活にも適用するように援助することを挙げている。これらの諸目的は課題志向的集団のそれとは明らかに異なっており，この種の集団[注1]の持つダイナミックスは，たとえばリーダーシップの効果などに関してかなり異ることが徐々に明らかにされつつある。われわれはひとまずこの種の集団を成長志向的集団と呼んでおくことにする。普通の状態における家族集団などもこの種の集団に含めて考えられよう。

成長志向的集団におけるリーダーシップの研究は，いまだきわめて少ない。三隅・阿久根（1971）は小学校4年生と5年生を対象にして親のリーダーシップと子供の学業成績，テスト不安や適応性との関連を調べ，オーバー・アチーバーの児童の親にはPM型やM型が多く，テスト不安は親がPM型やM型の時に低いことを見出した。さらに三隅・阿久根（1972）は小学6年生を対象にして達成動機の高い児童は教師のP機能・M機能をともに高く認知する傾向の強いことを見出している。

山口・佐々木（1971c）は勤労青少年の自主的な集団活動を調査し，次のことを明らかにした。効果性[注2]の高い集団は，①活動への動機づけ，集団の誘引度，集団内コミニケーション，集団の目標

本研究は関西学院大学社会学部昭和45年度佐々木ゼミナールの神谷精司君の努力に負うている。また本学岡村重夫教授および大阪中央児童相談所稲浦康稔所長には貴重なアドバイスをいただいた。さらに研究の実施を快よくお引き受けいただき，キャンプ期間中お力添えいただいた大阪青少年活動振興協会職員諸氏，同協会専属指導者諸氏およびキャンプ参加中学生諸君に対しても深甚の謝意を表する次第である。資料の分析に際しては本学計算センター雄山真弓氏ならびに藤田俊介氏に多大な援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。

注1　このような分類は集団の永久的類型ではなく，状況的なものとみるべきであろう。すなわち，同一の集団が所与の時点でどのようなタイプの目的に強調点をおいているかによって分類されるものである。

注2　集団効果性は「集団活動による個人の変化度」「他の成員に対する理解度」「他の成員から理解されている程度」「活動に対する満足度」を指標とした。

過程などの集団諸過程が良好であり，②リーダーシップ機能[注3]に関しては，集団全体（リーダーとフォロワーを含む成員の総体）としてP機能・M機能ともに多く果しており，特にリーダーたちは効果性の低い集団のリーダーたちに比してより多くのM機能を果していたのである。山口・佐々木（1971 a）はさらに中学校2年生の少年を対象とした訓練キャンプの効果をワーカーのP・Mタイプの側面から検討し，（集団TATによって測定された）少年たちの欲求の変化，キャンプの主観的成果，ならびに集団の誘引度，成員間の相互作用，ワーカーからの独立性—依存性の規範，キャンプ活動に対する満足感などの集団諸過程に対しPM型のワーカーが好ましい効果を及ぼすことを見出した。しかしながら，2度目の同様なキャンプの調査研究（山口・佐々木，1971 b）では，集団TATに対する反応の変化，キャンプの主観的成果にワーカーのP・Mタイプによる差異がほとんど見出せなかった。のみならず，先の研究で最も有効なタイプと見られたPM型は，集団TATにおいて反応「攻撃」の増加，あるいは集団の誘引度の低下といったネガティブな結果と結びついたのである。これはどのように説明されるであろうか。幸い，この2度目の調査研究においては，ワーカーの果したP・M機能とは別に，メンバー（少年達）が果したP・M機能をも同時に測定していた。これらワーカーの機能とメンバーたちの機能との間には，当然何らかの相互作用があるものと予想される。たとえば，ワーカーはメンバーたちの果すP機能が充分でなければこれを補い，反対にメンバーたちが充分にP機能を果しておれば，ワーカーはM機能に専念する，などである。もしワーカーがP機能を独占すれば，メンバーたちはいつまでもこの種の機能を果す機会が得られないであろう。そして現実のキャンプ集団の諸過程は，両者の機能のこのような相互作用によって規定されるものと思われる。本研究はこのような観点から，2度目の調査研究の資料を再検討し，このような集団におけるワーカーの効果的なリーダーシップを明らかにしようとするものである。

方　法

1）調査対象者及びキャンプ・プログラム：調査の対象は和46年度大阪府青少年キャンプ8月18

表 1　参加者の問題行動傾向

問題行動傾向	※全体の百分率 N=90	P村 N=56	A村 N=34	グループ別百分率※ P村 1 N=10	2 N=9	3 N=10	4 N=8	5 N=9	6 N=10	A村 7 N=8	8 N=8	9 N=9	10 N=9
イ）孤独，無口なもの	32.2 (29)	46.4 (26)	8.8 (3)	70.0 (7)	22.2 (2)	50.0 (5)	62.5 (5)	22.2 (2)	50.0 (5)	—	—	22.2 (2)	11.1 (1)
ロ）内気，引込思案なもの	55.6 (50)	80.4 (45)	14.7 (5)	70.0 (7)	77.8 (7)	100.0 (10)	87.5 (7)	77.8 (7)	70.0 (7)	—	12.5 (1)	33.3 (3)	11.1 (1)
ハ）神経質，心配性なもの	27.8 (25)	37.5 (21)	11.8 (4)	40.0 (4)	44.4 (4)	30.0 (3)	25.0 (2)	22.2 (2)	60.0 (6)	12.5 (1)	25.0 (2)	—	11.1 (1)
ニ）依頼心が強いもの	14.4 (13)	16.1 (9)	11.8 (4)	—	22.2 (2)	20.0 (2)	12.5 (1)	22.2 (2)	20.0 (2)	12.5 (1)	—	11.1 (1)	22.2 (2)
ホ）家にとじこもり学校を休みがちのもの	3.3 (3)	3.5 (2)	2.9 (1)	—	—	—	—	—	10.0 (1)	—	—	11.1 (1)	—
ヘ）劣等感が強いもの	11.1 (10)	14.3 (8)	5.9 (2)	10.0 (1)	22.2 (2)	20.0 (2)	25.0 (2)	—	—	12.5 (1)	—	11.1 (1)	—
ト）みえっぱり，関心をひこうとするもの	8.9 (8)	—	23.5 (8)	—	—	—	—	—	—	12.5 (1)	50.0 (4)	—	33.3 (3)
チ）落着きがないもの	25.6 (23)	10.7 (6)	50.0 (17)	—	11.1 (1)	20.0 (2)	12.5 (1)	22.2 (2)	—	62.5 (5)	37.5 (3)	55.6 (5)	44.4 (4)
リ）協調性に欠ける，自分勝手な行動をとるもの	13.3 (12)	1.8 (1)	32.4 (17)	10.0 (1)	—	—	—	—	—	12.5 (1)	50.0 (4)	33.3 (3)	33.3 (3)
ヌ）その他	11.1 (10)	7.1 (4)	17.1 (6)	20.0 (2)	—	10.0 (1)	—	11.1 (1)	—	25.0 (2)	12.5 (1)	33.3	—

※複数の問題行動傾向を持つものが含まれているので百分率の計は100を越える。

注3　リーダーシップ機能に関しては，リーダーの果したP・M機能と集団全体が果したP・M機能の2段階で測定した。

日～8月24日の6泊7日間実施）に参加した中学校2年生男子90名（ごく軽度の心因情緒障害児でキャンプによる訓練効果の期待できる者が含まれている）で，キャンプ参加中学生が学校場面で示していた問題行動傾向[注4]は表1に示す通りであった。テント・グループのグルーピングは問題行動傾向に関して比較的等質な8～10人を1グループとして10グループ編成した（各グループの成員数及び問題行動傾向の百分率は表1参照）。特に今回は問題行動の発現形態が比較的積極的な参加者から成るグループばかりを集めた「A村」と比較的消極的な参加者から成るグループを集めた「P村」の2つの村（テント群）が作られ，独立に運営された（A村は4グループ・P村は6グループから成り，同一村内の集団間は比較的等質であった）[注5]。また各テント・グループには1名のワーカー（キャンプ・カウンセラー[注6]と呼ばれている）が配されキャンプ期間中生活を共にしながら助言・指導を行なった。訓練キャンプは大阪府総合青少年野外活動センター第2キャンプ場において実施され，その主要なプログラム及び各種測定スケジュールは表2に示す通りであった。

2）各種測定：諸変数の測定は山口・佐々木(1971 a)に準じて行なわれたので，ここでは各変数測定を述べるにとどめる。

独立変数：①ワーカーの果したリーダーシップ機能；三隅(1966)のP・Mリーダーシップ論にもとづき，キャンプ中にワーカーが果したP機能・M機能に関するグループ・メンバーの認知を質問紙法によって測定した。P機能・M機能[注7]各8項目（各5点尺度）を用いて測定時Ⅸで測定した。P得点，M得点はそれぞれ8点～40点まで分布可能。②ワーカーの社会的勢力；French & Raven (1959) の言う5種の社会的勢力（報酬勢力・強制勢力・準拠勢力・専門勢力・正当勢力）にもとづいて，ワーカーの持つ社会的勢力をメンバーの認知によって測定時Ⅸで測定した[注8]。

従属変数：①メンバーのパーソナリティの変化；牛島・野村「集団TAT検査」（金子書房）によって被験者の欲求の種類（権力・愛情・社会的承認・所属・独立），フラストレーションに際しての反応の型（攻撃・退行・非現実）結末の種類（幸福・不幸・不定）及び欲求の関連している領域（社会・家庭・自己）が測定され，いずれも標準得点で示された。測定は測定時Ⅰ（集合地への集合直後）と測定時Ⅻ（キャンプ場退所式直前）に実施され，比較された。

その他の変数：①グループ・メンバーの果したリーダーシップ機能；グループ・メンバーが果したP機能とM機能に関するメンバーの認知を，ワーカーのP・M機能を測定したと同じ項目を用いて，測定時Ⅸで測定した。P得点は各8項目の合計点で，それぞれ8点～40点まで分布可能。②グループの誘引度（凝集性）；測定時Ⅱ・Ⅵ・Ⅺに今の班の人たちと「どのくらい仲良くなりたいか」「いつまでも一緒にいたいか」「次にも一緒の班になりたいか」の3項目を用いて測定した。誘引度得点は3項目（各5点尺度）の反応値の合計点で，3点～15点まで分布可能。③キャンプへの動機づけ；測定時Ⅱ・Ⅵ・Ⅺに，このキャンプは「おもしろいか」「よい経験を与えてくれるか」「もっと長くキャンプしたいか」の3項目を用いて測定した。動機づけ得点は3項目（各5点尺度）の合計得点で，3点～15点まで分布可能。④ワーカーへの依存度に関する集団規範と，ワーカーからの期待の認知；Jackson (1960) の return

注4　イ）～ヌ）の10種の問題行動傾向カテゴリーは大阪府青少年キャンプが参加中学生の学校場面での問題行動傾向を分離するためにもちいているもので，参加者の担任教諭からの報告にもとづいている。

注5　先のイ）～ヌ）の問題傾向でみると，A村には特にト）チ）リ）の傾向が強い者，P村にはイ）ロ）ハ）の傾向の強い者が含まれた（表1参照）。

注6　キャンプカウンセラーは4年制大学在学者でグループ・ワーク，レクリエーション原理，青少年心理などの専門的訓練をうけている。

注7　本研究におけるP機能及びM機能の概念的定義は，個人の社会的目標と集団の活動目標を達成するように援助する機能（P機能）及びメンバーを個別化して受容し，かつ集団全体を維持強化するように援助する機能（M機能）とした。

注8　準拠勢力の測定に山口，佐々木（1971）では『人柄が好きだから』という項目を用いたが，同一視を基礎とした準拠勢力の測定には不十分と思われたので，本研究では『カウンセラーのような人になりたいから』という項目を用いた。

表2　実施プログラムと測定項目の概略

	第1日 R村	第1日 A村	第2日 R村	第2日 A村	第3日 R村	第3日 A村	第4日 R村	第4日 A村
6:00			起床、洗面 共同作業	起床、洗面 共同作業	起床、洗面	起床、洗面 共同作業		
7:00			朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい		
8:00			朝食	朝食	朝食	朝食		
9:00			グループ別のキャンプ教室	スポーツ	プール	グループ別のキャンプ教室	グループ毎にルリ渓ハイキング行者山ハイキング共同創作スポーツなどがおこなわれた	グループ毎にルリ渓ハイキング行者山ハイキング共同創作スポーツなどがおこなわれた
10:00								
11:00	受付開始 測定時Ⅰ		自炊 昼食		自炊 コンクール	自炊 コンクール		
12:00	昼食			昼食				
13:00	バス乗車・出発		休息（午睡）	休息（午睡）				
14:00			キャンプ教室（救急法）	スポーツ	休息（午睡）	休息（午睡）		
15:00			グループ別のキャンプ教室		グループタイム（日課はグループの運営に任せる）	グループタイム（日課はグループの運営に任せる）		
16:00	キャンプ場到着 オリエンテーション 測定時Ⅱ						測定時Ⅵ	測定時Ⅵ
17:00	夕べのつどい		夕べのつどい	自炊 夕食			夕べのつどい	
18:00	夕食		夕食				夕食	
19:00	グループタイム	グループタイム	グループタイム	グループタイム	グループごとに明日の計画を立てる	グループごとに明日の計画を立てる	スタンツ・ファイアー	
20:00	オープニングファイアー							
21:00	測定時Ⅲ	測定時Ⅲ	測定時Ⅳ	測定時Ⅳ	測定時Ⅴ	測定時Ⅴ	測定時Ⅶ	
22:00	就寝	就寝	就寝	就寝			就寝	

	第5日 R村	第5日 A村	第6日 R村	第6日 A村	第7日 R村	第7日 A村
6:00	起床、洗面 共同作業		起床、洗面 共同作業		早朝登山	
7:00	朝のつどい		朝のつどい			
8:00	朝食		朝食		朝食	朝食
9:00	夏祭り準備（昼食はグループごとに自由に取る）		オリエンテーリング		グループタイム 測定時Ⅺ	
10:00						
11:00						
12:00					給食	
13:00					閉会式 測定時Ⅻ バス乗車・出発 青少年会館到着解散	
14:00						
15:00						
16:00						
17:00	夕食		夕べのつどい			
18:00			夕食			
19:00	夏祭り		測定時Ⅸ カウンシルファイアー			
20:00						
21:00	測定時Ⅷ		測定時Ⅹ			
22:00						

集団TAT
……測定時Ⅰ・Ⅻ

ワーカーのリーダーシップ機能
メンバーのリーダーシップ機能
ワーカーへの依存度に関する規範
……測定時Ⅸ

グループへの誘引度
キャンプへの動機づけ
……測定時Ⅱ・Ⅵ・Ⅺ

キャンプへの期待
……測定時Ⅱ

キャンプの主観的成果
……測定時Ⅺ

毎日のプログラムへの主観的参加度
毎日のプログラムの満足度
……測定時Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ

potential model を用いて測定時Ⅸで測定した。⑤毎日のプログラムへの主観的参加度及び，⑥毎日のプログラムへの満足度；第1日から第6日までの毎夜おこなわれた各グループ毎の集会（測定時Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ）において測定された。⑦キャンプへの期待と⑧主観的成果；キャンプへの期待は測定時Ⅱで，主観的成果は測定時Ⅺで測定した。いずれも「いろんな人と楽しく交わる」および「キャンプ技術の習得」の2側面について9点尺度で評定を求めた。これら8個の変数は本研究の理論的な枠組のもとでは媒介変数としての地位を与えられるべきものと思われる。[注9] この中で特に今回新たに加えられた①グループ・メンバーの果したリーダーシップ機能は，独立変数としてのワーカーのリーダーシップ機能の変動因の一つと考えられる。

結果及び考察

(1)ワーカーの果したリーダーシップ機能とメンバーの果したリーダーシップ機能との関係：ワーカーのP・Mタイプとメンバーが果したP・M機能（P・M得点）を図1に示した。ワーカーのP・Mタイプは，ワーカーの果したP・M機能に関するメンバーの認知（P・M得点）の平均値を基準として，P得点M得点ともに平均以上のワーカーをPM型，P得点のみ平均以上のワーカーをP型M得点のみ，平均以上のワーカーをM型，P得点M得点ともに平均以下のワーカーを pm型の4類型に類別した。[注10] 図1に見られるように，ワーカーがPM型であるグループのメンバーは，P機能・M機能のいずれをも平均以上に果しているPM型であり，ワーカーが pm 型であるグループのメンバーは，P・M機能を少ししか果していないpm型であった。ところがワーカーがP型であるグループではメンバーはM型，ワーカーがM型であるグループではメンバーはP型というように，ワーカーの主に果した機能とメンバーが主に果した機能とが異なるという結果が見られた。これはワーカーとメンバーとがリーダーシップ機能の果し方において相補的関係にある事を示唆している。

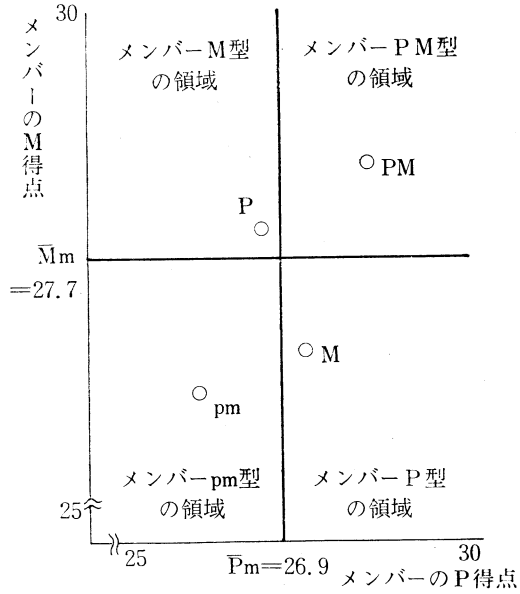

図1　ワーカーの果したP・M機能とメンバーたちの果したP・M機能との関係

（※○印は各タイプのワーカーのグループのメンバーたちの果したP・M機能を示している。
※図中メンバーのタイプを示す4領域の分割線は、メンバーのP得点点およびM得点の平均値である。）

(2)集団全体に作用したリーダーシップ機能：そこで次にワーカーの果したリーダーシップ機能とメンバーの果したリーダーシップ機能とを〝集団全体に作用したリーダーシップ機能〟という単一の測度に変換することを試みた。ひとまず便宜的にワーカーのP・M得点とメンバーのP・M得点との算術平均を算出しこれを集団全体に作用したP・M機能の測度として[注11]図2に示した。図2にみら

注9　もっとも，より詳細に見ればこれらの中でも相対的に独立変数に近く位置づけられるもの（例えば②③④⑦など）と従属変数に近く位置づけられるもの（例えば⑤⑥⑧など）が区別できるかもしれない。しかし多くの場合，変数間の因果関係は循環的であろうと思われるから，あまり詳細で固定的な変数の類別はこの様な現場研究においては生産的でないように思われる。

注10　PM型には3名，P型には4名，M型には1名，pm型には2名のワーカーが分類された。

注11　この方法はワーカーの果す機能がメンバー全員の果す機能と同じ比重であることを仮定していることになる。現実に即した両者の比重の決定は今後の研究課題であろう。

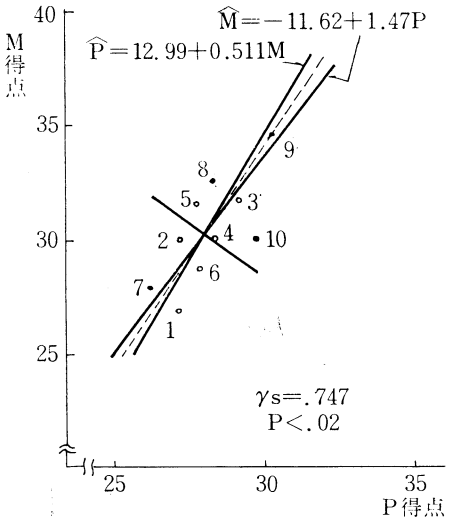

図2　集団全体に作用したP・M機能

れるように，この「集団全体に作用した」P機能とM機能とは非常に高い相関（rs=.747 P<0.2）を示している。このことはワーカーとメンバーの果すP・M機能の間には，集団全体として見た場合に，およそ一定の比率で両機能がバランスするように果されるという関係が存在する事を再度示唆している。

さて次に，「集団全体に作用した」P・M機能に関してHi群Lo群を設定するため，次の手続きを行なった。P得点のM得点に対する回帰直線とM得点のP得点に対する回帰直線を描き，これらを2等分する線（図2の破線）に対して回帰直線の交点（P得点，M得点の平均度）から垂線を立て，P得点M得点ともに高い領域（Hi領域）といずれも低い領域（Lo領域）とに2分割した。さらにメンバーの問題行動傾向の質を統制するためHi領域Lo領域からそれぞれA村に属するもの1グループ，P村に属するもの3グループを選ぶこととし，結局，No.3，4，5，8の4集団をHi群，No.1，2，6，7の4集団をLo群とした。ちなみに，Hi群及びLo群のメバーの持つ問題行動傾向の質が群間で実際に統制されていたかどうかは，図3に見るごとく，Hi群とLo群の問題行動傾向の構比成には有意な差が認られなかった。問題行動傾向は先の手続によって充分統制されたと考えてよい。

(3)**ワーカーの社会的勢力**：ワーカーの社会的勢力

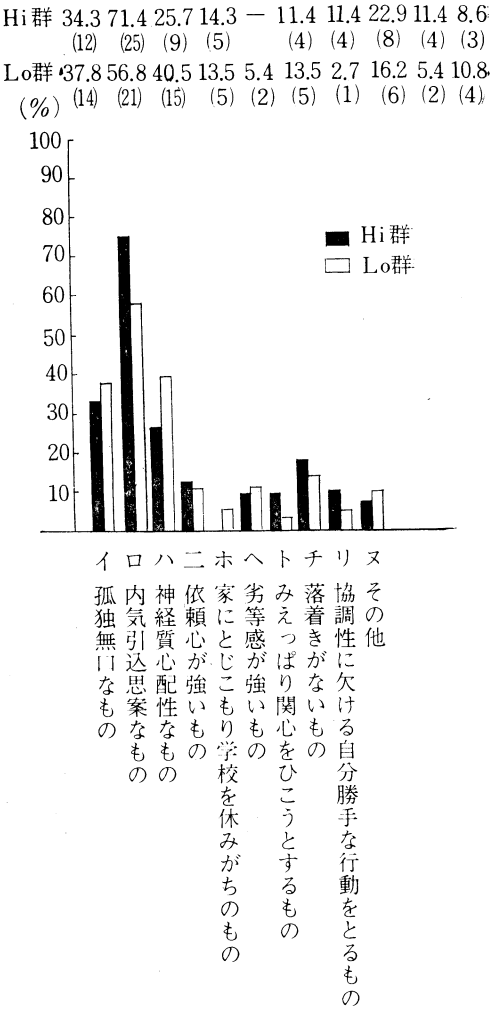

図3　被験者の問題行動傾向

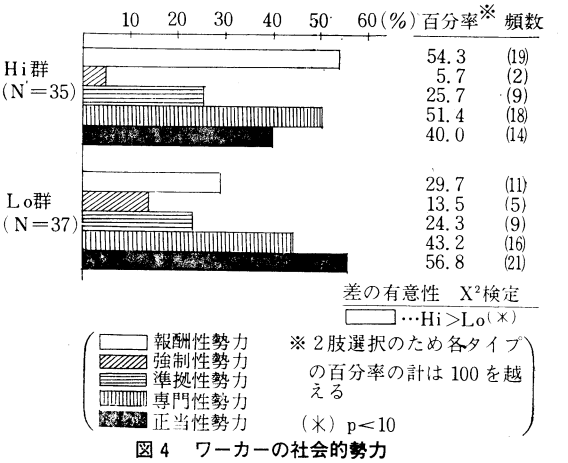

図4　ワーカーの社会的勢力

は図4に示した。報酬勢力においてHi群>Lo群

の傾向がみられれた。

(4)集団ＴＡＴに見られた変化：集団ＴＡＴに見られた変化は図５に示した。Hi群では反応「非現実」の減少に有意な差が見られ，Lo群では反応「退行」の減少，結末「不幸」の減少傾向が見られた。

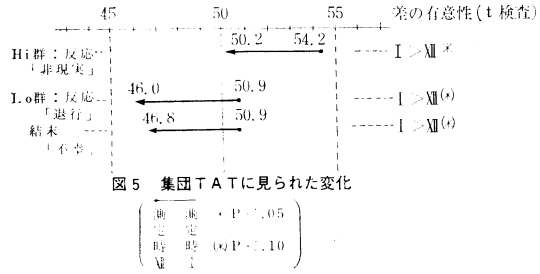

図５　集団ＴＡＴに見られた変化

(5)テント・グループへの誘引度及びキャンプへの動機づけ：誘引度及び動機づけは図６及び７図に

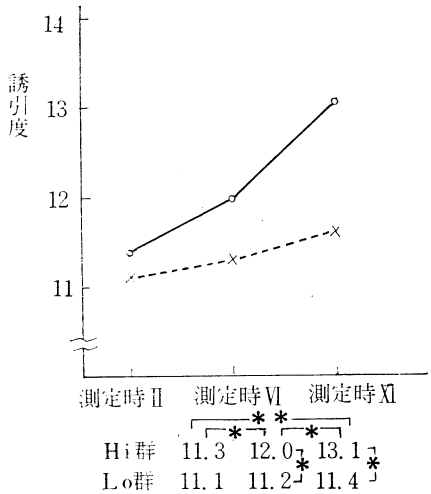

図６　集団への誘引度

（○—○Hi群　**P＜.01
×----×Lo群　*P＜.05）
t検定

示した。誘引度では測定時Ⅵ・ⅪでHi群＞Lo群の有意な差がみられ，Hi群は測定時Ⅱ・Ⅵ・Ⅺと有意に誘引度が高まっていた。動機づけについては測定時ⅪでHi群＞Lo群の有意な差が見られ，Hi群では測定時Ⅺは測定時Ⅱ・Ⅵより有意に動機づけが高まっていた。誘引度・動機づけともに測定時Ⅱでの測定値が，Hi群とLo群とで非常に類似していたにもかかわらず，時間の経過とともに有意な差を生じたことから，集団への誘引

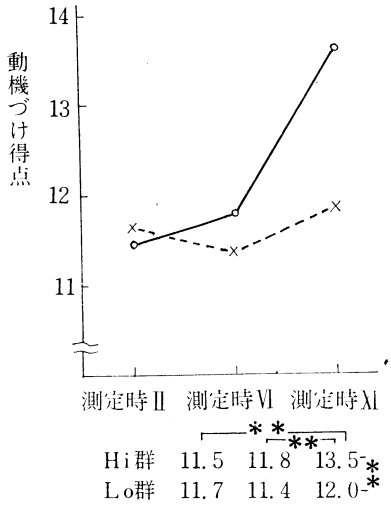

図７　キャンプへの動機づけ

（○—○Hi群　×---×Lo群
t検定　**P＜.01）

度やキャンプへの動機づけといった集団過程に対するHi群の優位性が明確に示された。

(6)ワーカーへの依存度に関する規範：ワーカーへの依存度に関する「集団規範」及び「ワーカーからの期待」を図８に示した。両群の特徴を読みとると，Hi群はLo群に比べて高い依存を否認し独立性（低い依存）を是認するような集団規範を生み出しており，同様にワーカーから低い依存（すなわち独立性）をより強く期待されているものと認知していた。Lo群ではHi群より相対的に是・否認のあいまいな（intensityの小さい）規範が形成されていたと解釈される。

(7)毎日のプログラムへの主観的参加度と満足度：主観的参加度と満足度の推移は図９に示した通りである。参加度についていえば，第４日を除く全期間においてHi群の方がLo群より高かった。また，満足度はキャンプの前半でHi群Lo群の差が見られたが，後半には両群間に差が見られなくなった。

(8)キャンプへの期待と主観的成果：「いろんな人と楽しく交わる」及び「キャンプ技術の習得」に関する期待と成果は図10に示した。「いろんな人と楽しく交わる」では期待には差が見られず，成果にHi群＞Lo群の有意な差が見られた。「キャンプ技術の習得」では期待・成果ともに両群間に差は

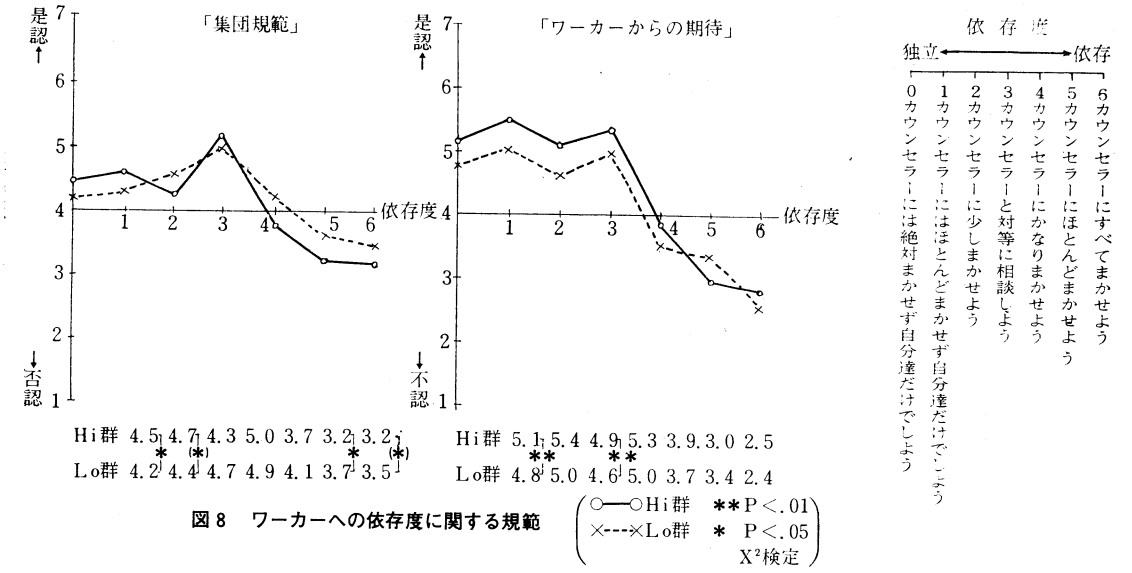

図 8　ワーカーへの依存度に関する規範

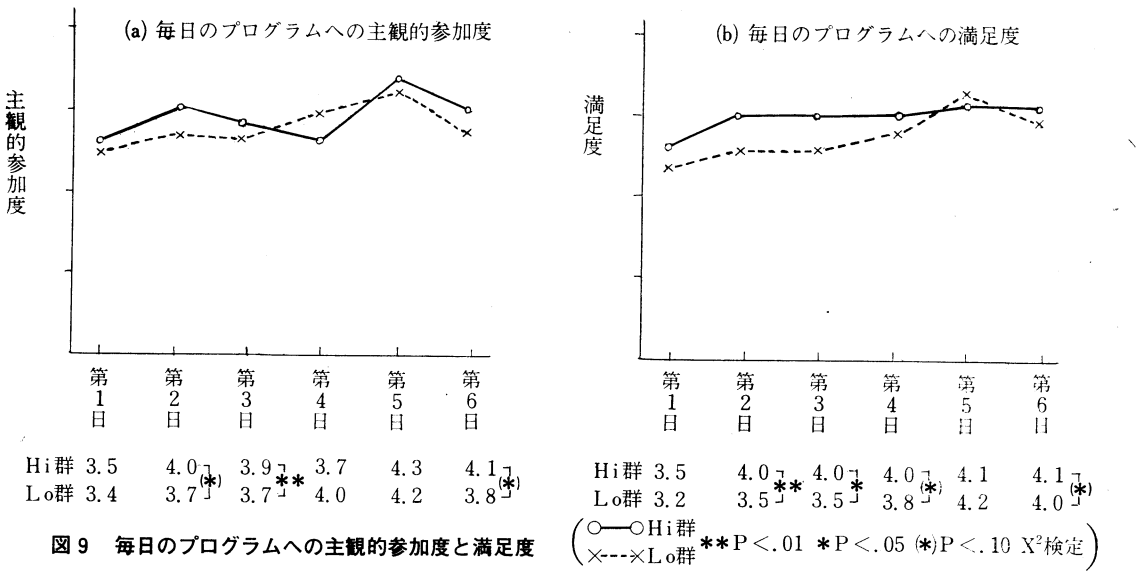

図 9　毎日のプログラムへの主観的参加度と満足度

『いろんな人と楽しく交わる』

			Hi群	Lo群	差の有意性 (X²検定)
測定時Ⅱ（期待）交わりたい	9 8 7 6 5 4 3 2 1	交わりたいと思わない	6.9	6.6	N.S
測定時Ⅺ（成果）交われた		交われなかった	7.3	6.4	Hi>Lo*

『キャンプ技術の習得』

測定時Ⅱ（期待）習得したい	9 8 7 6 5 4 3 2 1	習得したいと思わない	7.2	7.1	N.S
測定時Ⅺ（成果）習得できた		習得できなかった	7.1	6.9	N.S

図10　キャンプへの期待と主観的成果　（○—○Hi群　×---×Lo群　*P<.05）

みられなかった。「いろんな人と楽しく交われた」という主観的な成果が social skill の習得に基くものだという仮定に立てば，このような側面における効果に関しても Hi 群の優位性がみとめられよう。

考　察

本研究で明らかになった第1の点は，ワーカーの果したリーダーシップ機能とメンバーの果たしたリーダーシップ機能とが相補的関係にあったことであるが，ここでの相補的関係においてワーカーとメンバーのいずれが原因変数でありいずれが結果変数であるかは明らかではない。しかしながら，「ワーカーの役割は，グループによって異なるであろう。グループとそれが置かれている状況がそれぞれ異なっているから，ワーカーはグループと共にする特定の仕事を規定しようとする前に，そのグループとそれを取りまく状況を理解することに，先ず努めなければならない」(Trecker 1955, P 32) こと，また山口・佐々木（1971 a）が集団の発達的推移の中で考察しているワーカーの側の機能補完的役割を主にして考えれば，メンバーの機能を原因変数，ワーカーの機能を結果変数と見ることができるかもしれない。よく訓練されたワーカーほど，意識的にこれを行なうであろう。本研究が明らかにした第2の点は，ワーカーとグループ・メンバーたちが果した総体としてのP・M機能の量が大きい集団ほど成長志向的集団として有効である，ということである。集団TATによって測定された欲求の変化，キャンプ活動への動機づけ，グループへの誘引度，ワーカーへの依存度に関する規範，主観的参加度，主観的成果などに見られた差異はいずれも Hi 群の方が Lo 群よりも好ましいことを示していた。

以上のことを総合すると，成長志向的集団における効果的なワーカーとは，メンバーたちの果しているP機能とM機能とがアンバランスになっているグループにおいては両機能のバランスを回復するように機能し，さらに全体としてより多くのPおよびM機能が作用するように援助するワーカーであるといえよう。

このように，成長志向的集団におけるワーカーのリーダーシップの効果性を検討するに当って，従来の課題志向的集団のリーダーシップ研究に見られたようなリーダーのリーダーシップ・タイプからのアプローチのみでは，メンバーたちのリーダーシップ機能が統制されている場合を除いては不充分といえるだろう。

本研究で明らかになったP・M機能に関する相補的関係と類似した関係として，最近，三隅・石田（1972）は課題志向集団における2段階の監督レベルでのリーダーシップ・タイプの相補性効果と成員の動機づけ，満足度，生産性指数との関係を実験的に検討し，動機づけと満足度においては相補性類型群はPM類型群と重複類型群との中間に，生産性指数ではPM類型群と第2線監督者がP型で第1線監督者がM型の相補類型が重複類型群より高い生産性を示したことから，PM類型群及び相補性類型群は重複類型群より効果性が大であると結論している。三隅らのいう2段階監督レベルと本研究で検討したワーカーとメンバーとの関係を同一視することには慎重でなければならないが，そのダイナミックスに関しては比較的類似していることも予想される。

ワーカーとメンバーたちとのP・M機能に関する相補的関係は，次のような観点からさらに詳細な検討が必要であろう。(1)ワーカーがP機能の不足を補う場合とM機能の不足を補う場合とでは，集団諸過程及び集団の効果性にどのような差異が生じるであろうか。ちなみに山口・佐々木（1971 c）は勤労青少年の自主的集団活動を対象として行なった調査研究によって，効果的なグループのリーダーはM機能を多く果していたことを明らかにしている。(2)「集団全体に作用する」機能の量が同じであれば，その中でワーカーが果している機能の比率が異なっても，集団の効果性に差異は生じないであろうか（カウンセリングにおける指示的な方法とクライエント中心的な方法などとの関連が予想される）。(3)集団の発達に伴って，集団に必要とされる機能の量や質に変化が生じるであろう。たとえば Bales & Strodtbeck (1951) によれば，集団における問題解決の位相によって成員間に生じる相互作用過程は異なることが示されている。このような変化にワーカーはどのように対応すればよいのであろうか。

要　約

軽度の心因性情緒障害児を含む中学2年生90名を対象とした短期訓練キャンプ6泊7日においてワーカーが果したリーダーシップ機能との関係を検討し，両者がP・M機能に関して相補的関係にあることが明らかにされた。ちなみにワーカーのP得点とメンバーのP得点，ワーカーのM得点とメンバーのM得点の算術平均で求めた「集団全体に作用した」P機能とM機能の相関（スピアマンの順位相関）は $r_s = .747$，$P < .02$ であった。そこで集団全体に作用したP・M機能が共に大きいHi群と共に小さいLo群との差異が，集団TATによって測定された訓練キャンプの効果にどのようにあらわれるかを検討し，あわせてワーカーの社会的勢力，メンバーのグループに対する誘引度，キャンプへの動機づけ，ワーカーへの依存度に関する規範，毎日のプログラムへの主観的参加度及び満足度，キャンプへの期待と主観的成果などをも測定し，比較検討した。

比較に際しては，参加者の問題行動傾向に関して，Hi群とLo群に偏りを生じないように慎重に統制された。

(1) ワーカーの社会的勢力の認知に関しては，報酬勢力についてHi群＞Lo群の傾向が見られた。

(2) 集団TATに見られた変化は，Hi群で反応「非現実」に有意な減少が見られた。

(3) グループへの誘引度およびキャンプへの動機づけは，いずれもHi群において時間の経過とともに上昇し，誘引度は中期・期末において，動機づけは期末においてLo群との間に有意な差を示すにいたった。

(4) Hi群において，相対的にワーカーからの独立を是認し，依存を否認する集団規範が形成された。Lo群に形成された集団規範は，全般的にintensityの小さいものであった。

(5) 毎日のプログラムへの主観的参加度は，6日中1日を除いて全般的にHi群＞Lo群の傾向を示し，満足度は，第2日および第3日に有意なHi群＞Lo群の関係が見られ，その後両群は著しく接近した。

(6) 「いろんな人と楽しく交われた」とする主観的成果に，Hi群＞Lo群なる有意な差が認められた。

引用文献

Bales, R. F., & Slater, P. (1955) Role differentiation in small decision-making groups, In T. Parsons, R. F. Bales, et al. *Family, Socialization and Interaction Process.* New YorK : Free Press.

Bales, R. F., & Strodtbeck, F. L. (1951) Phases in group problem-solving, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 46, 485—495. 岩城富美子・佐々木薫訳，集団における問題解決の位相，三隅二不二・佐々木薫訳編　グループ・ダイナミックス〔第2版〕Ⅱ，33章，東京，誠信書房，1970.

Fleishman, E., Harris, E., & Burtt, H. (1955) *Leadership and Supervision in Industry : An evaluation of a supervisoɹy training program.* Columbus : Ohio State Bureau of Educational Research.

French, J. R. P., Jr., & Raven, B. (1959) The bases of social power, In D. Cartwright (Ed.) *Studies in Social Power* : Ann Arbor, Mich. : Institute for Social Research. 水原泰介訳，社会的勢力の基盤，千輪浩監訳　社会的勢力，9章，東京，誠信書房，1962. 佐藤静一訳，社会的勢力の基礎，三隅二不二・佐々木薫訳　編グループ・ダイナミックス〔第2版〕Ⅱ，32章，東京，誠信書房，1970.

Halpin, A., & Winer, B. (1952) *The Leadership Behavior of the Airplane Commander.* Columbus : Ohio State Univ. Research Foundation

Jackson, J. M (1960) Structural characteristics of norms. In G. E. Jensen (Ed.) *Dynamics of Instructional Groups.* Chicago : Chicago Univ. Press. 末吉悌次他訳　学習集団の力学，第7章，黎明書房，昭和42.

三隅二不二 (1966) 新しいリーダーシップ，ダイヤモンド社.

三隅二不二・阿久根求 (1971) 両親の指導性が児童の学業成績，テスト不安と適応性に及ぼす効果，教社心研，10(2)，157—168.

三隅二不二・阿久根求 (1972) 児童の達成動機，テスト不安および教師との同一化が彼らの教師の指導性認知に及ぼす効果，実社心研，11(2)，159—169.

三隅二不二・石田梅男 (1972) 二段階の監督レベルを含むリーダーシップ類型効果の相補性に関する実験室的研究，実社心研，11(2)，148—158.

Murphy, M. (1959) *The Social Group Work Method in Social Work Education, A Project Report of*

the Curriculum Study, XI, New York : Council on Social Work Education.

永田良昭（1965 a）第一線・第二線監督者のリーダーシップの研究Ⅰ——リーダーシップ測定尺度作成の試み——鉄道労働科学，17，75—82.

永田良昭（1965 b）第一線・第二線監督者のリーダーシップの研究Ⅱ——M機能の検討を中心として——鉄道労働科学．18，313—317.

Ohlsen, M. M. (1970) *Group Counseling*, New York : Holt, Rinehart and Winston.

Trecker, H. B. (1955) *Social Group Work, Principles and Practices*, New York : Whiteside. 永井三郎訳　ソーシアル・グループ・ワーク原理と実際，日本 YMCA 同盟，昭32.

山口真人・佐々木薫（1971 a）訓練キャンプの集団力学的研究，関西学院大学社会学部紀要，23，101—113.

山口真人・佐々木薫（1971 b）訓練キャンプの集団力学的分析（Ⅱ）関西心理学会第83回・日本応用心理学会第38回合同大会発表論文集，129.

山口真人・佐々木薫（1971 c）勤労青少年のグループ活動に関する集団力学的研究，日本グループ・ダイナミックス学会第19回大会発表.